

《女川原子力発電所「品質月間」集会を開催しました》

業務品質の一層の向上に対する意識を高めるため、11月1日(火)から30日(水)まで発電所および構内協力企業合同による品質月間行事を展開しています。この一環として、11月1日(火)には、発電所員および構内協力企業社員約1,300人が参加し、「品質月間」集会を開催しました。

集会では、優れた品質管理を行っている協力企業や品質向上への意識を高める標語を提案した社員への表彰が行われました。

最後に、参加者全員で優秀作品に選ばれた標語を唱和し、品質保証活動の一層の強化について誓いを新たにしました。



標語の唱和



構内協力企業を含め、安全最優先で業務品質の向上に取り組んでまいります。

品質保証部 品質保証総括グループ
本間 洋(新潟県出身)

優秀作品

「ちょっとした工夫で 減らせるリスク 何かあるはず出来る事 気付いて防ぐ ヒューマンエラー」
「迷ったら 先に進むな、立ち止まれ 仲間に相談 上司に連絡 みんなで造る確かな品質」



ガスタービン発電機(車両に搭載)

《ガスタービン発電設備の工事を進めています》

女川原子力発電所では、万一の事故が発生した場合でも、原子炉を安全に保つために必要な電力を確保する対策のひとつとして、軽油を燃料とするガスタービン発電設備の設置工事を進めています。ガスタービン発電設備は、津波による影響を受けないように海拔約62メートルの高台に設置し、送電線からの電力や非常用ディーゼル発電機が使えなくなった場合に、原子炉を冷やすための水を送るポンプなどに電気を送ります。現在は、地下に設置した軽油タンクをコンクリートで包み込む工事をしています。

今後、軽油タンクの隣にガスタービン発電機を設置する予定であり、引き続き安全最優先で工事を進めてまいります。

地下軽油タンク設置工事



地下に軽油タンク(3基)を設置
(平成28年3月撮影)



地下軽油タンクの上の
コンクリート工事を実施
(平成28年10月撮影)

ガスタービン発電設備ってどんな設備?

どのような仕組みですか?	車両にガスタービンと発電機を搭載しています。ガスタービンに燃料を供給して、連結された発電機を運転することにより電気を作ります。
燃料の軽油タンクはどのぐらいの量ですか? また、どのぐらいの期間連続運転できますか?	110klの軽油タンクを3基設置します。また、このタンクで7日間連続運転することができます。
軽油タンクを地下化した理由は?	竜巻や台風などの自然災害の影響を受けないようにするためです。



万一の事故の際、しっかりと電気を確保することが何より重要であることから、品質確保に留意しながら、安全最優先で工事を実施しています。

保全部 電気グループ
杉浦 利一(石巻市出身)

《「おながわ秋刀魚収穫祭2016」に参加しました》

9月25日(日)、「おながわ秋刀魚収穫祭2016」(主催:女川魚市場買受人協同組合)が開催されました。当発電所も当社キャラクター「マカプウ」の大型遊具「ふわふわマカプウ」を設置し、来場されたみなさまに楽しんでいただきました。



《「東北電力杯女川・牡鹿親睦交流グラウンド・ゴルフ大会」を開催しました》

10月5日(水)、当社協賛による「第5回東北電力杯女川・牡鹿親睦交流グラウンド・ゴルフ大会」(主催:女川グラウンド・ゴルフ協会)が開催されました。当日は、女川地区および牡鹿地区から82名が参加し、日頃の練習の成果を発揮されました。



《「こんにちは人形劇」を開催しました》

石巻市立鮎川小学校、女川町勤労青少年センターの2会場で、地域の保育園児、小学生を対象とした「東北電力こんにちは人形劇」を開催しました。お子さんたちは、歓声を上げながら楽しい時間を過ごしました。



9月28日(水)石巻市立鮎川小学校で「ふしぎなきき耳ずきん」を上演しました。



10月13日(木)女川町勤労青少年センターで「おむすびころりん」を上演しました。

《女川原子力発電所周辺の放射線量は安定しています》

女川原子力発電所周辺の放射線はモニタリングポスト^{*1}やモニタリングステーション^{*2}で測定・監視しており、その測定値は宮城県および当社ホームページで公開しています。

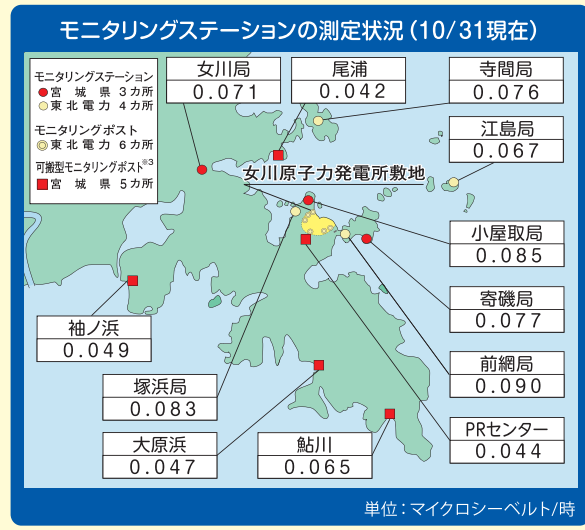
発電所敷地内に設置してあるモニタリングポストの現在の測定値は、最大で0.058マイクロシーベルト/時程度で安定しており、健康に影響を与えるレベルではありません。

^{*1} モニタリングポストは発電所敷地周辺の環境放射線を測定しています。女川原子力発電所の敷地境界には6基のモニタリングポストが設置されており、その最小値と最大値について、東北地方太平洋沖地震の発生日の値、それ以降で最大値が測定された日(平成23年3月13日)の値、毎年度(4月1日)の値、至近の値を掲載しています。

^{*2} モニタリングステーションは環境放射線に加えて気象データを測定しています。

^{*3} 宮城県では、震災により測定不能となっているモニタリングステーションの代替として、可搬型モニタリングポストによる測定を行っています。

^{*4} 東京電力福島第一原子力発電所からの放射性物質の放出に伴い測定されたもので、測定された時間は約10分間です。



(参考)モニタリングポストの最小値と最大値	
〈東北地方太平洋沖地震発生日〉	平成23年3月11日 0.027~0.064
〈地震発生後最大値〉	平成23年3月13日 1.8~21 ^{*4}
〈地震発生以降毎年度(4/1)の値と至近値〉	平成24年 4月1日 0.063~0.098
	平成25年 4月1日 0.055~0.076
	平成26年 4月1日 0.046~0.065
	平成27年 4月1日 0.043~0.077
	平成28年 4月1日 0.041~0.061
	平成28年10月1日 0.038~0.056
	平成28年10月31日 0.040~0.058

単位: マイクロシーベルト/時

新規制基準適合性審査状況のお知らせ(10月末現在、審査会合81回開催)

《基準津波の策定について》

女川2号機の適合性審査では、基準津波^{*1}の策定について審議されています。(平成28年9月30日) 当社からは、前回までの審査会合で原子力規制委員会から説明を求められている3.11型地震(連動型の巨大なプレート間地震)に関する水位下降側の検討結果、ならびに海洋プレート内地震、津波地震等に起因する津波の評価について、不確かさを考慮^{*2}して計算した結果を説明しました。

また、上記に加え、女川原子力発電所2号機における津波評価を総合した「基準津波」の妥当性についても審議され、原子力規制委員会からは、概ね妥当な検討がなされていると評価されました。

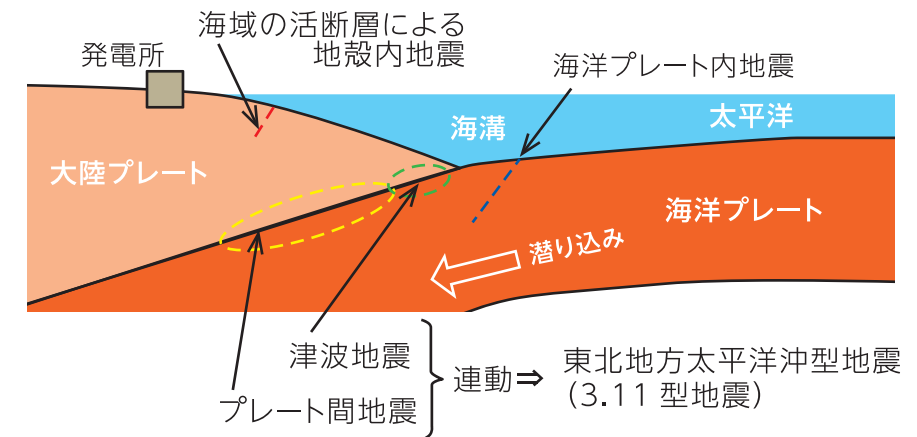
このため、女川原子力発電所の敷地前面における基準津波の最高水位は、3.11型地震に起因する津波の評価結果である「O.P.^{*3}+23.1m(申請時評価値と同一)」となりました。

なお、今後の津波関係の審査では、発生確率を考慮した津波評価や基準津波に対する安全性について、引き続き審議される予定となっております。

- ^{*1} 原子炉施設の供用期間中(運転開始から廃炉までの間)に極めてまれではあるが発生する可能性があり、施設に大きな影響を与えるおそれがある津波。
- ^{*2} より厳しい条件等で評価を行う観点から、科学的に合理性のある範囲で、様々な数値シミュレーションを行うこと。
- ^{*3} 女川の工事事業基準面(Onagawa Peil)のこと。O.P.±0.0mは、東京湾平均海面(T.P.)-0.74mに相当。

基準津波の策定(結果)

津波の発生原因		該当する地震など	基準津波
地 震	プレート間地震	3.11型地震(連動型) 津波地震(単独型)	最高水位(O.P.+23.1m)
	海洋プレート内地震	1896年明治三陸地震等	
	地殻内地震	1933年昭和三陸地震等	
海底すべり、火山現象		海域の活断層	影響は極めて小



審査会合の詳細は当社ホームページをご覧ください。

東北電力 女川審査会合

検索